

論文審査の要旨

報告番号	保論 第 4 号		氏名	淀川 尚子
審査委員	主査	中尾 優子		
	副査	山下 亜矢子	副査	宮田 昌明
	副査	牧迫 飛雄馬	副査	田平 隆行

Effects of food neophobia and oral health on the nutritional status of
Community-dwelling older adults

地域在住高齢者の食物新奇性恐怖と口腔保健が栄養状態に及ぼす影響について

高齢者の食嗜好と口腔の健康状態は高齢者の栄養状態に大きく影響する。高齢期には食物新奇性恐怖（food neophobia）が高まることが示されており、嗜好の幅を狭めることから高齢者の低栄養リスクを高める可能性がある。また、歯数の減少や口腔機能の低下、口腔関連QOLと栄養状態との関連について、各要因が独立して影響を与えていることが報告されているが、食物新奇性恐怖を考慮した検討はされていない。そこで、学位申請者淀川尚子氏は、食物新奇性恐怖とタンパク質の摂取状況や口腔機能、現在歯数、口腔関連QOLなどの口腔保健をモデルとして、低栄養リスクに関連する要因を明らかにすることを目的として研究を行った。

対象者は、65歳以上の地域在住高齢者238名であった。自記式質問紙を用いて、食物新奇性恐怖、タンパク質摂取頻度、口腔関連QOLについて調査した。また、口腔機能として口唇、舌先、舌後方の運動機能を測定し、さらに、簡易栄養調査(MNA)を用いて栄養状態について調査した。統計分析は、栄養状態が良好な群と低栄養のリスクがある群を比較し、ロジスティック回帰モデルを用いて解析された。

結果、高齢者の低栄養リスクと関連する因子として、食物新奇性恐怖が有意に高く、口腔機能と口腔関連QOLが有意に低いことが示された。食物新奇性恐怖症の高齢者では、新規食品に関する情報を提供することで、食品の嗜好性が高まる可能性が考えられた。また、個人が認識している口腔内の健康状態（機能的、社会的、心理的側面）を把握することが重要であり、臨床パラメータとともに口腔関連QOLの指標を用いることが、高齢者の栄養リスクを予測するのに有用であると考えられた。さらに、口腔に関する些細な変化を察知し、早期に適切な介入を行うことで、口腔機能低下から低栄養への悪化を回避できる可能性が考えられた。このことから、低栄養予防を目的とした介入において、個人の口腔保健の状況や食物嗜好を把握することの重要性と有益な具体的取り組みの必要性が示された。これらの総合的アプローチは、高齢者の食習慣を多面的に理解した上で実施できる新しい栄養サポート戦略につながる可能性がある。

審査の結果、5名の審査委員は、本論文は地域在住高齢者の食物新奇性恐怖に着目し、栄養状態に及ぼす要因について検討したことは新規性、独自性があり、本論文の結果は保健学の発展に寄与するものと評価した。今後、高齢者の低栄養予防の研究や実践につながることから、博士（保健学）の学位論文としての価値を十分に有すると判定した。